

隨想

初詣で所感

— 大和・大神神社に参拜して —

大和 水田 長

(本会賛助会員
南海新報見水浦出身)

本年のお正月の初詣では、早朝より大和の大神神社に参拜しました。誌上で拜見しました記事と考えながら

大和盆地の東南隅に、俗に青山と謂う大神神社があります。土地の人は「三輪の明神様」と称んで、畿内では庶民の最も尊崇を集めてゐる神様であります。説によりますと、日本最古の神様で、祭神は大物主神又は大國主命、又の名を大穴牟遲神とも申し上げ、靈驗あらたかな神様であります。

此の丘に立って大和乎野を望めば、誠に詩情豊かな萬葉の昔を偲ぶ感がいえます。西に見ゆる叡傍山、香具山、耳成山、俗に云う大和三山は朝霧の中に包まれて、歌人ならぬ私達にも何か口ずさみたい情感を覚えます。

此処より程遠からぬ場所へ(飛段)と、天理教徒は「親里」と称して、参拜客に「ようこそ遠方よりお帰り遊ばして」と、教徒も参拜客と迎える。彼等はここを人類發祥の地と考へてゐるのでしよう。

長い女房かな参道と、先若男女はひきも切らず、長蛇の列をつくり、昔ながらの天幕張りの店は雨側に景気よく参拜客を呼び込んで、周囲は食物の縁起もの売込及びおみやげです。

古木の松並木は青い緑と増し、千代の手輪は神社の壯

麗さを増し、参道は掃き清められた玉砂利で、歩む聲音がさわやかに聞こゆる。参道の西側は深山で、青い木がうっそうとして山の深さを感ぜさせる。朝の陽はようやくさしこめて木の間に透し、ひよどりやうぐいすのこぼれにさえずる。

拜殿には参拜人の肘を抜くよう大きな注儀、又直位、五十種余の古木に神火を置き、人々に暖をとせている。そしてハツヒと着左社守の人々かせわし気にその世話役をうけてゐる。

太古、この地より佐伯氏は大和朝廷の命をうけて、紫の「くはもり」として出立したのであろうか。佐伯氏の始祖と思へば、まことに因縁次第からざる神様である。争々を考へながら拜殿にゆがずく。私は天理教徒に云う親里の感を深くした。

この神社には、昔から生玉子を背負して供えり祈習がある。よく聞いて見ると大神はそよよを大穴牟遲の神と申し上げ、大穴牟遲とは即ち大蛇の意で、この大蛇に供えるものだと云う。噂によるとこの大蛇は青山が大神神社の御神体で、数多くの蛇が巣喰ひ、到る処に巣をあらわしているとのこと、最も千年斧と入れざるこのお山に蛇の住まふことは当然ながら、その蛇にまつある伝説が多いことは有名な事である。

話は佐伯氏の始祖である大神惟基が大蛇の化身であるとか、又竹田の千丁の滝に大蛇が棲み、これが大神氏の始祖であるとか。大蛇の伝説が共通の要点があることから考へ合せると、この大神神社のことはその裏付けと異なる様に思われてならない。

(お正月の手記より)